

41 伊古田純道の帝王切開術学習

について

石原 力

一八五二年六月十二日（嘉永五年四月二十五日）現埼玉県飯能市坂元一二九八番地本橋家において、執刀者伊古田純道、助手岡部均平で、本邦最初の帝王切開術が行われ、母体を救うことができた。日本医史学会では、日本産科婦人科学会、埼玉県医師会と共に、「帝王切開発祥の地」記念会をつくり、手術の行われた本橋家の土地に、一九八七年六月十二日記念碑を建てた。明後年は術後百五十年になるが、この機会に純道が帝王切開術をどのようにして習得したか、考察してみたい。

伊古田純道（一八〇二—一八六）は、彼の行った帝王切開術について、詳細なメモ『子宮截開術實記』を子孫の中島家（藤岡市）に残している。しかしこの中には、「西医ノ経験スル所」と記しているが、自身の術の習得には触

れていない。

純道が西洋産科に触れた最初は、一八二五（文政八）年八月岡部と共に入門した如達堂であろう。これは小室元長、元貞父子により経営せられ、現埼玉県比企郡都幾川村番匠四七一にあった。純道は一八七五年に小室家を訪ね、先師の墓参をなし、五十年前を追慕して漢詩をつくっている（「檜陵遺稿」所収）から、入門の時日は間違いない。元長は賀川流の流れを汲み、元貞は西洋産科を以て名を成していた足立長雋に信頼された門人である。元貞は長雋の講義録、及び『産科礎』卷之二を校定し、『産科輯要』乾巻、及び坤巻を作っている。元貞の家督相続は一八二七年正月で、純道は入門後数年で現秩父市大字伊古田四一四へ帰った。純道は元貞が長雋から学んだ足立流の蘭方（内科的）産科と賀川流とを習得したと考えられる。

一九四一年建てられた「始祖帝王切開術伊古田純道翁」記念碑文には、純道が「長崎に赴きオランダ医術を体得すること余年」とあるが、立証するものがない。

純道は伊古田で開業、名主を勤めた後、一八四一年頃修

業の念を起こし、江戸へ出て諸名家に就き医学や和漢の学を究め、江戸菓研堀の佐藤泰然に入門した。このことから長崎遊学は否定できよう。その後伊古田へ帰り開業、一八四五年に現秩父市東町に移り開業した。従って四十歳頃数年間、江戸で泰然から外科の手ほどきを受け、初めての帝王切開を一時間で行う程の技倆を習得したと考えられる。一八五四年順天堂の治療代を記した書類成田不動尊資料館蔵)に「割腹出胎兇術 金拾両」とあり、それを実施した確証はないが、帝王切開の術式について泰然から聞く機会があったと推測される。

帝王切開を行ったとき、純道が直接よりどころとしたのは Gottlieb Salomon (一七七一—一八六五) の Hand-leiding tot de verloskunde (二版、一八二六) の矢田部卿雲による訳書『撒羅滿氏産論』(二八四五)であることは間違いない。中島家には純道自筆の『撒羅滿氏産論抄書』があるが、原本はない。彼が原本をどこで入手して抄書を作ったのか、謎であった。浅田晃彦の小説『帝王切開事始』では、泰然の所蔵本を写したとなっているが、卿雲の翻訳完了時には純道はすでに伊古田へ帰郷してい

るのでありえない。一方柳田敏司氏は小室家の『撒羅滿氏産論』との関係を明確ではないが示唆している。

一九八七年「帝王切開発祥の地」記念講演会で、私は『撒羅滿氏産論抄書』と、佐伯理一郎—阿知波五郎所蔵本、及び小室本を比較し、佐伯本の「テゲル」が小室本と抄書では「ネゲル」のように、後二者の一致が顕著で、小室本が底本であることを指摘した。今回再調査で、佐伯本では「ケイゼルレーキスネゲ法」の後に横骨切断法があるのに対し、後二者では前にあることが判明した。従って小室本を抄録したと考えられる。

純道の帝王切開の背後には、小室家の存在があり、それにつながる足立長雋や、佐藤泰然の存在がある。

(清風園診療所)